

◇平成7年度重点普及課題の評価◇

タカセガイの2次放流手法開発

担当者 平手康市

1. 課題名 タカセガイの2次放流手法の開発

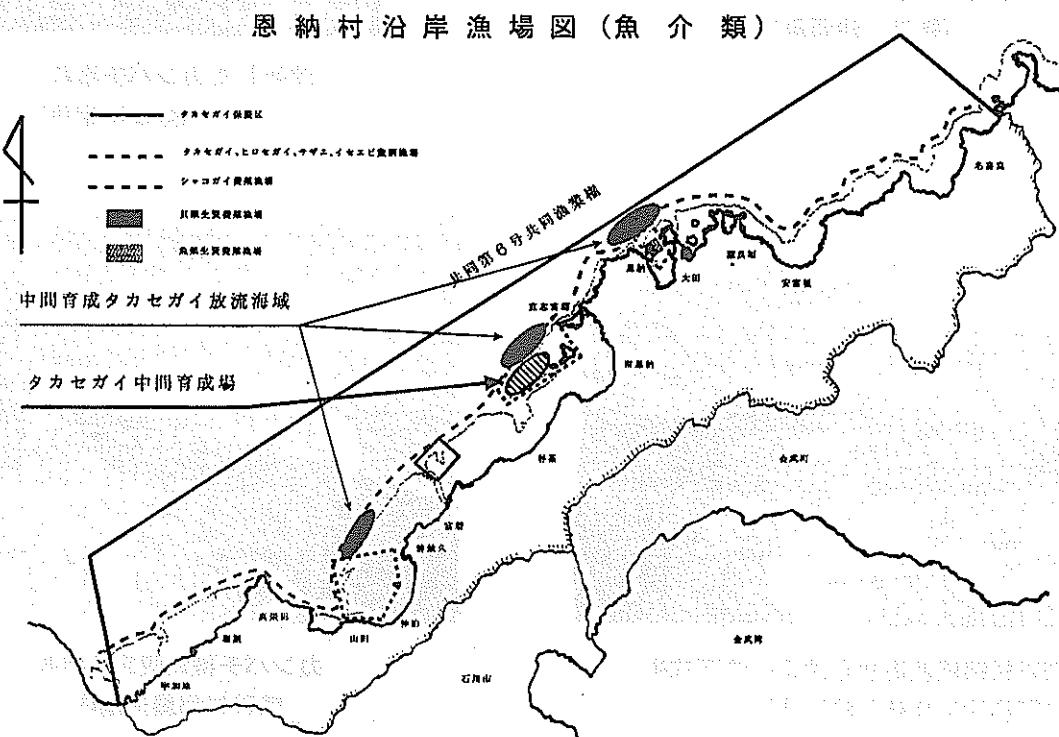
2. 実績と評価

平成7年2月16日に栽培漁業センターにおいて種苗生産されたタカセガイ約10万個（平均殻径5.20mm）を恩納村屋渦瀬原地先に設置されているタカセガイ中間育成礁に1次放流した（中間育成の経緯については地域普及活動に報告）。これを同年10月23日に恩納村漁協組合員の協力を得て、中間育成礁より中間育成タカセガイ種苗約3万個（平均殻径29.35mm、平均体重6.81g、n=150）を取り上げ、同村地先海域3地点に約1万個づつ放流した（図1）。今回の放流方法は、船上からの投入する手法（図2）を採用した。また、放流種苗追跡の予備実験として、アンカータグと着色瞬間強力接着剤を併用したマーキングを施した種苗（図3）約300個をスキューバ潜水により仲泊

地先の礁斜面海底3カ所（水深2.5m、10mおよび20m）に着底放流した。これを同年11月3日にスキューバ潜水により追跡調査したがマーキング個体、無マーキング個体および貝殻とともに確認できなかった。

3. 次年度の展開

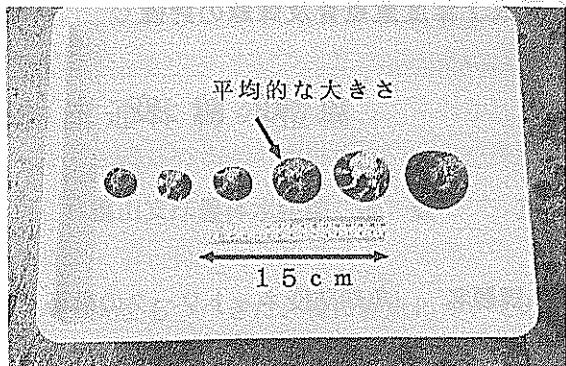
放流直後から放流種苗の動向を経時に把握できない現状で放流効果を知るためにには、2次放流したタカセガイ種苗がコマーシャルサイズに達して（およそ3～4年程度を要すると思われる）漁獲されないとデータを得ることが出来ない。重点普及課題の設定期間（3ヶ年）中に放流手法を開発するためには、短期間に内に放流効果を調査しなければならない。その為、効率よく種苗を追跡する調査法の開発が急がれる。





内部のグレーチングを取り出している。

中間育成種苗の取り上げ作業

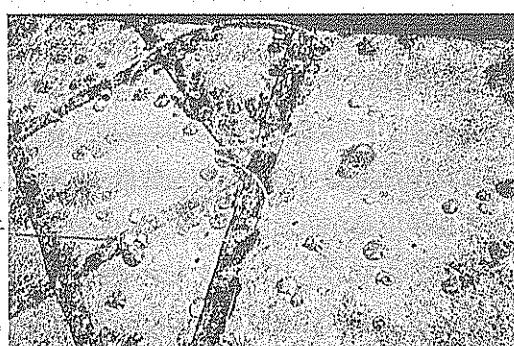


平均的な大きさ

15 cm

礁外からサンプリングした育成種苗

中間育成種苗を採取する際は、礁外からサンプリングする方法が最も効率的である。礁外では、水深が浅い場所で採取する場合、礁外に設置された浮遊式育成礁を用いて、礁外で採取した種苗を礁内に放流する方法が採用される。



グレーチングを取り外した育成礁内部



放流用種苗にマーキングを行う。



育成礁外で確認した育成タカセガイ



育成種苗放流作業

今回は、船上からの投入と潜水して定着させる方法を採用した。